ヒロイン　*based on a novel"Be Careful What You Wish For"by number2*

＊この小説は、number2 作"Be Careful What You Wish For"に着想を得て、日本を舞台として翻案したものです。

早朝、突然、従妹の真美から電話がかかってきた。

その前夜、ぼくはとあるホームページの小説欄に投稿する新作を書きおえて送信し、しばらくその小説に書いた妄想に耽りながら、自慰を楽しんだ。

電話のベルにたたき起こされ、寝ぼけ眼で受話器を取り上げたぼくの耳に、真美の声が飛び込んできたときは、思わずうろたえてしまった。

「なに、もごもご言ってるのよ」

真美は何時ものつっけんどんな調子で言った。

「ちょっと頼みがあるんだけど、隆司、パソコン持ってる？　あ、そう。ワープロソフトはなに？　一太郎？　あ、じゃちょうどいいや。今日、パソコン貸してくれない？　明日までにレポート仕上げなきゃならないんだけど、私のパソコンぶっこわれてやんの。フロッピーにバックアップ

があったからいいんだけど、一太郎入ってるパソコンもってんの、回りにいないんだよね。今から行くから、使わせてよ」
隆司はぼくの名前だが、彼女は八歳も上の従兄を平然と呼び捨てにする。
「で、何時までそこにいるの？　八時？　じゃあ、三十分後にいくからさ、見られて困るものがあったらカタしといてよ。じゃあ」
さっさと電話を切られ、ぼくは慌てて彼女の指示どおり、ビデオや雑誌の類を押入れの奥に押し込み、それからカップラーメンのカスやら灰皿かわりの空缶などをゴミ袋に詰めた。
かっきり三十後、玄関のチャイムが鳴った。ドアを開けると、ぴったりしたTシャツに脛の途中でカットしたジーンズ、サンダル姿の真美が、ぼくを見下ろしていた。
「おはよ」
彼女は、長い髪の毛をかき分けてずかずかと入り、サンダルを脱いであがった。
真美は母方の従妹だった。八年前、大学進学のために上京したぼくは、十歳のころの真美しか知らない。二カ月前、突然彼女から電話が来た。会社の近くの喫茶店であった彼女は、見違えるようだった。
「東京に行ったら、まっさきにタカシに会え、というから会ったんだけどさ」
彼女は、不機嫌そうに言ったものだ。ろくな会話も交わさず、一時間ほどお茶を飲んで、その日は別れた。

今日、会うのは彼女が上京してから二ヵ月ぶりだった。改めて見る彼女は、ほんとうに美しく成長していた。一七三センチの長身で、ぼくよりも一〇センチは高い。脚が長く、ぼくの腰くらいはある。ほっそりとしているが、胸の膨らみはそうとうなものだ。眼が大きく、くっきりと太く長い眉が気の強い性格を現している。
彼女はぼくの部屋を見回し「ふうん、ちゃんとカタしてるじゃん」と呟くと、デスクに座り、パソコンの電源スイッチを押した。
「合鍵、ある？」
パソコンが立ち上がるのを、頬杖ついて眺めていた真美が不意にぼくのほうを見た。
「う、うん……」
ぼくは慌てて合鍵を捜し出し、彼女に差し出した。
「終わったら、ポストに入れておけばいいよね」
「う、うん」
彼女は、合鍵をジーンズのポケットに仕舞うと、もはやぼくのことなど何の関心も持たないと言わんばかりに、すっとした背筋を見せキーボードを叩きはじめた。
「それじゃ……」
ぼくは消え入りそうな声で、アパートを出た。

その夜。
仕事を終えて帰宅したぼくは、窓からに明かりが漏れているのに気づいた。まだ、いたのか、と思いながらドアノブに手をかけると、鍵は閉まっていなかった。
玄関に真美が座っていた。にやにやしながら、ぼくを見上げている。Tシャツの胸元から豊かな乳房の谷間が覗いた。
「あ……もう、終わったの？」
玄関に突っ立ったまま言うと、彼女は立ち上がり、しばらく軽蔑したようにぼくを見下ろしていた。ぼくはどうしていいやら分からず、鞄を胸に抱え、蛇に睨まれた蛙のように立ちすくんでいた。
真美の肉感的な赤いぽってりした唇が動いた。
「……このチビ」
次の瞬間、凄まじい痛みが股間を襲った。
一瞬、体が持ち上げられ、足がコンクリートの床から離れた。
どさりと玄関にくずおれたぼくは、股間からこみあげる激痛と嘔吐に包まれた。呼吸することすらできなかった。
彼女は、ぼくの睾丸を膝で蹴り上げたのだ。
「読ませてもらったよ。あれ、隆司が書いたんでしょ？」

真美はぼくの頭髪をつかみ、むりやり顔をあげさせた。
「……最近、上京してきた女子大生のマミって私のことだよね。で、タカシってのはお前のことだよな？　で、私にあんなことされたいって妄想に耽ってたわけか」
言いおわると、平手打ちが飛んできた。ぼくは右手で打たれた頬を、左手で激しく痛む股間を覆い、体を前に屈めて防御の姿勢をとった。
真美はぼくの襟首をつかんで立たせた。ほっそりした体に似合わぬ力だった。そのまま彼女は、ぼくをデスクまでひきずった。
「これ、なに？　『従妹は女王様』っての！」
ディスプレイには、昨夜書き上げた小説が開いてあった。デスクトップに「ＮＯＶＥＬ」と記したフォルダーに入れてあったのだ。しまった、とぼくは思った。彼女はレポート執筆の合間に、覗いてみたに違いない。
「……そ、その」
抗弁しようとして、またも睾丸を蹴り上げられた。ぼくは悲鳴をあげ、床に転がって悶絶した。
「チビ！　変態！　ブタ！」
真美は容赦なく、ぼくの背中や肋骨や腰を蹴った。ぼくは涙を流して転げまわって避けようとしたが、ついに部屋の隅に追い詰められた。
真美は、またもぼくの頭髪をつかんで顔をあげさせ、顔に唾をはきかけながら、嘲るように言

った。
「押入れも見せてもらったけどさ、隆司がM男だってことがよ〜く分かったよ。隆司のことなんか関心ないから別にいいんだけどさ、この小説はなに？　なんで私が隆司の望みどおりに苛めてやったあと、手コキして昇天させてやんなきゃいけないわけ？　そんなの想像しながらオナニーしてたかと思うと、反吐が出そう！」
言いおわると、彼女はぼくの頭を壁に打ち込んだ。
ぼくは失神した。

目が覚めたのは、翌朝だった。
全身がズキズキ痛んだ。やっと起き上がり、足を引きずりながらトイレに入った。陰嚢が腫れ上がり、血尿が出た。
鏡を見ると顔も腫れ上がっていた。こんな顔では出社できないな……と呟き、とりあえず休むか、明日はとくに特別の用事はないし、とトイレを出て電話器に手をかけた。
その瞬間、電話がやかましく鳴った。ぼくは飛び上がった。その拍子に股間に激痛が走り、しやがみこんでしまった。
「いててててて……」
眼から涙が溢れた。電話はまだ催促するように鳴っている。ぼくはやっと立ち上がり、受話器

を取り上げた。
「……もしもし」
「吉村隆司さん？」
鈴を鳴らすような女性の声だった。
「そうですけど……」
「私、横山一恵って言います」
ヨコヤマ・カズエ？　ぼくはしばし沈黙した。聞き覚えのない名前だった。
「あの……どちらの横山さんですか？」
「覚えてらっしゃらないんですか？」
電話の向こうの相手は可愛らしく間延びした声で反応した。ぼくは必死に考えた。そういえば、記憶の隅っこにそんな名前があったようにも思えるが、何時、どこで会った女性なのか、どうしても思い出せない。
「すみません……思い出せません……」
「そう……」
がっかりしたような声だった。
「あの、それで何か？」
「近所まで来てるんですけど、一度、お目にかかりたいと思って」

「はあ……」
新手の勧誘かな？　とぼくは疑った。のこのこ出掛けて行ったら、待ち合わせ場所におっかないお兄さんがいたりするかもしれない。
「でも……そろそろ会社にいく時間だし……」
「まだ七時ですよ。一時間くらいお時間あるでしょう？」
なんでぼくの出勤時間を知ってる？
「あ、まあ、そうですけど……でも……」
「お手間はとらせません。ほんのちょっとでいいんです」
「はあ……」
はっきりと拒絶できないのはぼくの悪い癖だが、同時に、電話の向こうの可愛らしい声の主に会ってみたいという気持ちもまた強かった。
「あの……まあ、いいですけど、どこで？」
「こちらから伺います」
「ぼ、ぼくのとこにですか？」
「ええ」
「場所は……あの、ご存じですか？」
「もう来てます」

ドアが開く音がした。ぼくは仰天して受話器を置き、玄関に向かった。
小柄な少女が立っていた。

うわあ。
昔、独身の寂しい男の部屋に、女神様やらビデオのなかの女の子やらが突然押しかけるアニメがあったが、まさにファンタジーの世界に引き込まれたような気分だった。
年齢は十六、七くらいだろうか。身長は一五〇センチ代の半ば。白いブラウスにピンクのミニスカート、白いソックスにスニーカー。両手を前に下げ、小さなハンドバッグを持っている。
ミニスカートから延びた細い脚、小さな撫で肩、細い首の上にちょこんと小さなポニーテールの頭が乗っている。三日月型の眉に、円らな黒目がちの瞳。ロリコンマンガから抜け出たような美少女だった。
「横山一恵です」
呆然と突っ立っているぼくに、彼女はぺこりと頭を下げた。
「あ……あの……」
ぼくは狼狽し、きょろきょろ周囲を見回した拍子に、玄関に下がった鏡に写る自分の顔が見えた。
ぼさぼさの髪の毛。赤く腫れ上がった顔。昨日来ていたポロシャツの、さまざまなところにか

ぎ裂きが出来ている。
「す、すいません」
ぼくは思わず頭を下げた。少女はけらけらと笑った。
「なんで謝るんですかぁ？」
「え、いや……その……」
「上がらせていただいていいですか？」
「え？　あ、どうぞ」
幸い、昨日真美が来たので部屋のなかは片づいている。
横山一恵はぼくの部屋に上がり込み、カーペットにちょこんと座った。
「あの……何か飲みますか？」
ぼくはうろうろと当てもなく歩き回りながら言い、ふと、デスクの上のパソコンの画面いっぱいに、黒地に桜吹雪の舞うスクリーンセーバーが画面いっぱいに広がっているのに気づいた。昨日からつけっぱなしだったのだ。
ぼくは慌てて、電源を切るためにマウスを握った。スクリーンセーバーが消えた。一太郎の画面が広がっていた。
ぼくは硬直した。
それは、かつて書いた自作小説のひとつだった。

〈一恵は、タカシの顔の上にまたがり、顔面騎乗のポーズをとった。彼女の秘められた部分の芳香に、タカシはますます興奮した〉
げえっ！
ぼくは画面をスクロールした。タイトルは「女子高生女王様」。一行目にはこう書いてあった。
〈高校二年生の横山一恵と知り合ったのは、出会い系ＳＭサイトだった〉
「あ、あの……？」
「はい？」
横山一恵は小首を傾げ、微笑みを絶やさずに返事した。
「あなたは……高校生？」
「はい」
「すいません。……ちょっと覚えてないんだけど……なぜぼくと知り合いに？」
「やだな」
一恵は笑い出した。
「昨日、メールをくれたじゃないですか。ぼくの家で一緒にプレイしましょうって」
「……」
「住所と電話番号もちゃんと書いてありましたよ」
「そ、そですか……」

ぼくはメールボックスの送信箱を開いた。送信履歴にそれらしいものはない。
「そ、それで……」
ぼくは口ごもりながら訊ねた。
「あの……その……出会い系で……」
「ええ、『S女さんとM男くんの出会いのチャットルーム』の2チャで昨夜お話したでしょ」
昨夜は、真美に股間を蹴られて延びていたのだ。当然、チャットなんかしているはずがない。
つと、一恵が立ち上がり、ぼくに近寄って肩に手を置いた。
「顔面騎乗がお好きなんでしょ？」
ぼくは慌てて一太郎を閉じようとしたが、一恵はさっとぼくのマウスを取り上げ、スクロールした。
「顔面騎乗されながら、蝋燭を垂らされたり、乳首に洗濯ばさみを挟まれたり……」
〈一恵は、赤い蝋が一面にまみれたタカシの胸板を愛撫しながら、洗濯ばさみを乳首に挟み付けた。鋭い痛みが走り、タカシのいきりたったペニスが快楽に激しく痙攣した〉
「でも、私はそういうの好きじゃないんですよね」
一恵は言いながら、ぼくの胸に指を走らせた。吐息が耳たぶにかかった。
「私が好きなのは……」
彼女の指がぼくの腹部を滑り落ち、股間に延びた。

「これ！」
一恵が思い切り、ズボンの上からぼくの睾丸をひねりあげた。
「ぎゃあああああ！！！」
腫れ上がった睾丸をひねられ、ぼくは絶叫し、椅子から転げ落ちた。
だが、一恵はぼくの睾丸から手を離さず、今度は両手で、睾丸を一つずつ、ますます強く握りしめた。ぼくは仰向けになり、体を激しく左右に振ってのけぞった。凄まじい激痛と嘔吐。下腹部全体が焼けただれたようだった。
「うふふ……、そういうふうに痛がってる男の人を見るのが大好きなんです」
一恵はますます強くひねりあげた。睾丸が平たく変形するのがわかった。このまま潰されるんじゃないか。強い恐怖にかられ、ぼくはなんとか逃れようともがいた。だが、自分の身体が自分のものではなくなったかのように、何もできなかった。
「ああ……濡れてきたみたいです……」
一恵が吐息をつき、眼を半ば閉じ、唇を半ば開けたまま、荒く肩で呼吸を始めた。
「このまま、潰しちゃっていいですか？……」
「や、やめてーーーー！！！」
ぼくは絶叫した。
「るせーぞ、このチビ！」

一恵が突然、がらりと低い声で怒鳴った。
「変態野郎！　私みたいなイケてるコに潰してもらうだけ、ありがたいと思え！」
そして、右手の拳を固め、思い切り、ぼくの睾丸にパンチを浴びせた。
視界が暗くなった。そのままぼくは意識を失った。

やっと眼が覚めたときは夕方だった。下半身全体が熱く燃えているようだった。
朦朧とした意識がやっと明確になり、今朝の記憶を取り戻した瞬間、ぼくははっと恐怖にかられて上半身を起こした。
股間を見た。ズボンをはいたままだった。股間を確かめようとしてジッパーに手をかけたとき、鋭い痛みが走り、ぼくは悲鳴をあげて仰向けに倒れてしまった。
そのまま、三十分くらい、ぼくは痛みを堪えながら悶絶していた。
突然、携帯電話が鳴った。
ぼくはよろよろと床を這って、デスクの上に置いた携帯電話をとった。
「ばっきゃろー！」
いきなり怒鳴り声。係長の上田さんだ。
「てめえみてえな無能なカスが、無断欠勤とはいい度胸じゃねえか」
そうだ！　会社に、今日は休むと電話してなかったのだ。

「……あ、あの……」
「何度も電話したのに無視しやがって。お前なんかクビだ！」
「ち、違うんです……」
「違う？　何が違うんだよ？」
「じ、実はお客が……」
「お客？　お前、今日外回りの仕事なんか入ってたか？」
ぼくの仕事は営業なのだ。
「あ、その……」
「どっちにしても、直行直帰はちゃんと事前に連絡するのは、常識だろが！」
「ち、違うんです……」
「だから、どう違うんだよ！」
「あの……横山一恵って子が」
「なに、女か！」
上田さんは沈黙した。ぼくも沈黙した。どう説明すればいいのだ。いきなり女子高生がやってきて、ぼくの金玉をひねって気絶させて帰っていった、なんて、言ったら最後、病院行きを命じられるだろう。
ふと、パソコンのディスプレイが眼に入った。

一太郎が開かれていた。
「リストラされて」というタイトルの下に、ぼくが書いた小説があった。
〈その夜、タカシは会社を首になった。がっくりと部屋で酒を飲んでいると、玄関のチャイムが鳴った〉
「女が来てたから、勝手に会社休んだってのか……」
上田さんの呆れたような声につづいて、玄関のチャイムが鳴った。
〈そこにやって来たのは、タカシの会社の上司にあたる真鍋玲子だった。バリバリのキャリアウーマンの玲子は、タカシより二つ上の二十八歳だったが、タカシはヒラ社員なのに、彼女はすでに課長だった〉
「もう会社来なくていいからな！」
電話が切れた。
再びチャイム。
「あら、ドア開いてるじゃない。吉村くうん、入るよ」
入ってきたのは、ベージュのスーツを来た女性だった。

「あの……まさか……」
ぼくは吃った。

「まさか？」
見知らぬ女性はきょとんとした表情になった。
身長は百六十五センチくらい。軽く脱色したショートカットの下に、理知的な美貌。膝上のスカートから、長く、ほどよく筋肉のついたきれいな脚が延びている。ジャケットの下の白いブラウスの胸が大きな膨らみを見せていた。
「どうしたの？　上田係長カンカンよ。部長が宥めて、私に様子を見にゆくように言われたんだけど……」
〈「どうしたの？　上田係長カンカンよ。部長が宥めて、私に様子を見にゆくように言われたんだけど……」〉
小説と同じ台詞だった。
「あ……あの」
「なに？」
「ひょっとして……真鍋玲子さん？」
女性は哄笑した。
「なに言ってるのよ！　いつも職場で顔合わせてるじゃない。いまさら確認することはないでしょ」
「はあ……」

「吸っていい？」
真鍋玲子はカーペットに座り、ハンドバッグからヴァージニアスリムライトを取り出した。ぼくは慌てて灰皿を差し出した。
なんでこう、次から次へと、自分が書いた小説のヒロインがやってくるのだろう。悪い夢でも見ているのか？
「リストラされて」の設定では、真鍋課長は、じろじろ胸ばかり見ているタカシに平手打ちを食わせ、ロープで縛りつけ、鞭で叩いたり、靴を嘗めさせたり、聖水を顔にかけたりする。鞭やロープは、大きめのハンドバッグのなかに忍ばせてあるのだ。
ぼくは、真鍋玲子が傍らに置いたグッチのハンドバッグを見つめた。
「どうして、無断で会社を休んだりしたの？」
その声に、ぼくは視線を彼女の顔に向けた。
「ちゃんと説明して」
彼女は微笑んでいた。
「あの……」
ぼくは俯いた。やはりどう説明していいのか分からない。
しかも彼女は、ぼくの職場にいるはずのない（ぼくの直属の課長は男性なのだ）、信じがたいが、ぼくの小説から抜け出して来たとしか思えない女性なのだ。

「相変わらず、はっきりしないんだね」
彼女は呆れたように、口から煙を吐き出した。
「そんなことだから、営業成績があがらないのよ」
ぼくはそっとパソコンの画面を盗み見た。
〈「そんなことだから、営業成績があがらないのよ」〉
彼女は次にどんな態度に出るだろう。ぼくの小説の筋書きどおりの行為をやってくれれば、小説に書きつけて憂さを晴らしてきた長年の妄想が実現することになる。とはいえ、二日つづけて、睾丸を蹴られるなどの暴行を受けた。その傷痕は癒えていない。体力的にもつかどうか自信がなかった。
そこまで考えてぼくはハッとした。
そんなことあるはずがない。小説が現実になるなんて。もしほんとうにそうなるのなら、横山一恵がぼくの睾丸をひねったりするはずがないのだ。ぼくは、いわゆる玉マニアの気持ちだけはどうしても理解できない。
「んもう！　なぜ黙ってるの？」
苛立った声を無視して、ぼくは眼を逸らせ、必死に思考をめぐらせた。
いちばん合理的な解答は何か。事の発端は、昨日、突然やってきた真美が、ぼくのパソコンに保存してあった小説のファイルを盗み見たことから始まった。

彼女が読んだのが、真美をモデルとした『従妹は女王様』だけでないとしたら、説明がつかなくはない。
彼女は友人を動員し、ぼくの書いた小説そっくりの女性を演じてもらい、好きでない睾丸攻めを浴びせることでモデルとされた復讐を遂げようとしているのではないか。
真美は昔から喧嘩が強かった。小学生のとき、自分をからかった男子をぼこぼこにしたことがある。金玉を蹴ったかどうかは、現場を見たわけではないから知らない。中学生のとき、嫌いな同級生からラブレターをもらい、そいつを屋上に呼び出して大怪我させたこともあるという噂も聞いていた。
ぼく自身は彼女から暴力を振るわれた経験はないが、彼女を妄想のなかで女王様に仕立てたのは、そんな噂を聞いていたからだ。
あの性分だったら、サディスティックな性分の矛先をぼくに向けてきたとしてもおかしくない。
「ちょっとお！」
真鍋玲子が床をどんと叩いた。
「ほんとに、社会人なんだから、ちゃんと説明しなさい！　私だって暇じゃないのよ。業務命令だから仕方なく来てるだけなんだから！」
「あの」
ぼくは決然と顔をあげた。

「高野真美って女性を知ってますか？」
彼女の瞳がかすかに狼狽したのを、ぼくは見逃さなかった。
「なにを言いだすの？」
彼女は取り繕うように言った。
「答えてください。知ってるんですか？」
真鍋玲子は無言で立ち上がり、つかつかとぼくに近寄った。
ぼくは思わず、両手で顔を覆い、股間をぴったりと閉じた。
ドスッ！
彼女は、無防備なぼくのみぞおちにパンチを叩き込んだ。目の前が一瞬真っ暗になり、激痛と嘔吐がこみあげた。
ぼくは両手でみぞおちを抑えた。次の瞬間、股間に蹴りが飛んできた。
「うぐっ！」
胃袋の中身が一斉に口に目掛けて噴き出してくるのが感じられた。ぼくは股間を両手で抑えてうずくまり、嘔吐した。
ただし、一日なにも食べていなかったので、吐き出されたのは血の混じった胃液だけだった。
「きったねえ！」
今度は回し蹴りが、ぼくの頬に炸裂した。ぼくは壁に叩きつけられた。無様に広げられたぼく

の股間を、次の一撃が襲った。真鍋玲子は、踵でぼくの睾丸を踏みつけたのだ。
「ぁぁぁーーーーーーーーーーー！」
もはや絶叫は声にならなかった。ぼくはカエルのように口をパクパクし、激しく痙攣した。
そのとき、玄関のチャイムが鳴った。
「開いてるよ」
真鍋玲子が言った。
「お邪魔しま～す」
入ってきたのは横山一恵だった。

もはや、思考能力は失われていた。
ぼくは股間を両手で抑え、うつ伏せになり、全身をかけめぐる激痛と戦っていた。
「あら～、もう潰しちゃったんですかぁ？」
横山一恵ののんびりした声が響いた。
「まさか」
真鍋玲子がくすくす笑った。
「二度ほど金玉に蹴り入れてやっただけ。なのに、もうあんなになってるの」
「うふふ……。勃起してます？」

「勃起？」
「玉フェチって、蹴られたら勃起するんですって」
「ほんと？」
「さっそく、見てみましょうか」
二人の女性は、ぼくを仰向けにしズボンを脱がせた。抗う気力は残っていなかった。
「うわっ」
真鍋玲子が叫んだ。
「すっご～い。玉袋がミカンみたいに膨れてる」
「でも、おちんちんは鉛筆みたい」
横山一恵はくすくす笑った。
「もともと小さいんでしょうけど、なんだか萎びちゃって、干物みたいですね」
「じゃ、玉フェチじゃないってこと？」
「ええ……。顔面騎乗と首締め、鞭に聖水ってとこが趣味みたいですね」
「あはは……。それにしても見事に膨らんでるよね。これ、潰しちゃったら、どうなるのかな」
「なんでも、精液と血が、ここから飛び出してくるんですって」
一恵はちょんちょんと指先で、ぼくのペニスの先端をつついた。
「で、玉袋がメロンくらいに膨れちゃうんですってよ」

「面白そう」
真鍋玲子が笑いながら、ぼくの陰嚢をつついた。ぼくの身体は電気ショックを受けたように激しくのけぞった。
「あはは、つっついただけでそうとう痛いんだ」
「玲子さんは、ご経験ないんですか？」
「経験？　痴漢の玉を蹴ったことはあるけど、こうやってまじまじ見るのは始めてなんだよ。まさか、潰した経験あり？」
「まさか。私も見るのは初めて。全部、真美さんに教わったんです」
やはり……。わずかに残った理性のなかで、ぼくは思った。
グルだったんだ。
「やっほ」
玄関で声がした。
真美だった。

「お。もうへばっちゃってるの？　M男のくせに、こらえ性ないんだね」
ずかずかとあがってきた真美は、ぼくの傍らにしゃがみこみ、いきなり陰嚢をひねりあげた。
ぼくは激しく痙攣した。

「二度、蹴っただけだよ」
真鍋玲子が言った。
「でも、私が来る前に、一恵がそうとう痛めつけたみたい」
「十回くらい叩いたかな」
一恵は微笑んだ。
「その前に、ぎゅっとひねってやったんですけどね」
「私も昨夜、十回くらい蹴ったんだよね」
真美が言った。
「ちょっと、不公平じゃん」
真鍋玲子が口を尖らせた。
「潰す前に、私にも、もっと蹴らせてよ」
潰す？
「いいよ。ちょっと一恵、手伝って」
「はい」
真美と一恵が、両脇からぼくの腕をつかみ、持ち上げた。
「あ……あの……」
ぼくは必死に声をふり絞った。

「潰すって……どういうこと？」
返事がわりに、真美の平手打ちが飛んで来た。
「脚を広げて！」
つづいて一恵の平手打ち。
「広げないと、ほんとうに潰しますよ」
思わず、ぼくは両脚を開いた。すかさず真鍋玲子の蹴りが飛んできた。爪先が、ぼくの腫れ上がった睾丸に食い込んだ。
「ぐっ！」
口のなかに、再び甘酸っぱさと苦さの混じった液体が胃袋から吹き上げた。間髪の入れず、二度目の蹴り。
意識が弾け飛び、あとは暗黒の世界だった。

意識を取り戻したとき、ぼくは大の字に寝ていた。
全裸だった。両手首と両足首に太いロープが巻き付けられ、その先端は部屋の隅に縛りつけられていた。
身動きできなかった。縛られていたせいだけではない。神経がすべて麻痺してしまったようで、それなのに痛覚だけは激しくぼくの肉体を苛んでいた。

「気がついた？」
真美の声だった。首だけをようよう持ち上げた。まっさきに、お腹の向こうに盛り上がった赤い肉の塊が眼に飛び込んだ。
ぼくの陰嚢だった。まるでメロンのように膨張していた。
カーペットに座り込んで缶ビールを飲んでいた三人の女性がいっせいに笑った。
「覚えてる？」
真美がぼくににじり寄り、コピー用紙の束を眼の前につきつけた。
プリントアウトされたコピー用紙のヘッドには「三人のクイーン」と大きな文字が刻まれていた。
「究極の快楽は、死の恐怖である……ふふふ、そうなの？」
そんな一節を書いたような記憶がある。どんな内容だったかは、熱に冒されたような脳裏には蘇ってこない。
「三人の女王様に苛められた挙げ句、首を締められて死ぬ話よ。あんたの妄想どおり、殺してやってもいいんだけど、それじゃ犯罪だもんね」
なぜ、そこまでして……。ぼくの行為は、ここまでの仕打ちを受けなければならないほどひどいものなのか。
マミなんてありふれた名前じゃないか。誰も、実在の高野真美がモデルだなんて気づくはずが

ないじゃないか。
「ただ、私を侮辱した罪は贖ってもらうよ。男としての人生は今日で終わり」
真美が嘲笑しながら言った。
「かといって、女になられても困るよね」
真鍋玲子が言った。
「世の中にブスがまた増えるだけだもん」
「男でも女でもないといったら……オカマ？」
横山一恵がくすくす笑った。
「でも、ほんとうに死ぬかもしれませんよ。江戸時代に、玉を潰しの刑があったんですって。けっこう、ショックで死んだってなんかに書いてました」
「それなら、それでいいじゃん」
真鍋玲子が笑った。
「究極の快楽を味わえるんだから」
「さて、と」
真美が立ち上がった。一恵と玲子もぼくの傍らに寄ってきた。
カチカチと金属音が響いた。三人の手に、大型のペンチが握られていた。
「玲子は左側、一恵は右側ね。で、私は」

ペニスの両側に冷たい金属の感触があった。真美がペンチでペニスを挟んだのだ。
「これ」
男性としての最後の瞬間を間近に控え、ぼくは思った。「三人のクイーン」の結末はこう変えておくべきだった、と。
〈いよいよ死ぬ……。次の瞬間、タカシの全身は凄まじい快楽に包まれた。膨れ上がった陰嚢から、精液が迸った。
「どうだった？」
眼を開けると、三人の女王様の優しい笑顔があった。
「よかった」
タカシが答えると、三人は満足そうに頷きあった。そのあと、ぼくたちはビールで乾杯し、楽しい一夜を過ごしたのだった〉